

# 世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談  
佐佐木幸綱(歌人)



## 収藏品のご紹介

田辺和雄 「山日記」

平成24年度の収藏品について

齋藤茂吉が留学の際に使用したトランク(コレクション展「旅についての断章」出品)

館長の作家対談

ゲスト  
佐佐木幸綱  
(歌人)

聞き手  
菅野昭正  
(世田谷文学館館長)



現代歌壇を代表する歌人の佐佐木幸綱さんをお招きし、当館館長がお話を伺いました。

短歌の名家に生まれて

館長▶佐佐木さんは短歌の名門の家にお生まれになった方ですが、歌は何歳くらいからお作りになされたのですか。

佐佐木▶祖父の佐佐木信綱は周囲の皆に短歌を作らせる人で、孫たちにも作らせましたので、子ども時代から作りました。ただ、ちゃんと作り始めたのは20歳からです。父が僕の20歳の誕生日に死んで、その時、この事をきちんと、偉そうにいうと思化しないといけない、何か言葉にしたいと考えて、はじめて短歌を真面目に作りました。館長▶お父上から短歌をやったら、とは言われなかったのですか。

佐佐木▶父はそういうことを言いませんでした。祖父の信綱ですね。僕と信綱は66歳違いますが、

僕が大学院の学生の頃まで生きていました。館長▶歌の手ほどきもお受けになられたのですかね？

佐佐木▶熱海の家に行くと、晩飯の時は一緒に。私の子ども時代は戦後の甘いものが無い頃で、それにつられて作られました(笑)。

館長▶その場で添削があるのですか？  
佐佐木▶はい、その場で添削して、短歌雑誌「心の花」に載せてしまうんです。

館長▶ご自分の歌集には入れたのですか。  
佐佐木▶入れません。みんな直されてしまって、半分は信綱が作ったようなものだから(笑)。

館長▶合作ですけど根はやっぱり佐佐木さんのものですか、いつか歌集に入れて下さい。ここにやっぱり原点があった、原点は存在すると思われるのでは？「心の花」はいつ創刊されたのでしょうか。  
佐佐木▶1898年創刊の月刊です。

館長▶120年近い歴史がありますね。今は佐佐木さんが主宰なさっておられるのですか？

鳥泰樹君が少し下です。大学の時に「早稲田短歌」という雑誌で、小野茂樹さん、寺山修司さんたちがちよつと上にいました。あと、故人になりましたが、春日井健君は同じ年でした。

館長▶その頃からずつと切磋琢磨してきたんですね。佐佐木さんが最初の歌集を出されたのはいつですか。

佐佐木▶1970年、31歳の時です。清水康雄さんが青土社を創立して詩の雑誌「ユリイカ」を創刊します。同じころ、僕の歌集も出してくれました。

館長▶その前からお付き合いがあったわけですね。佐佐木▶河出書房新社の編集部で一緒でした。坂本一亀さんが局長、その下が清水さんで僕の直接の上司でした。僕は坂本さんに文壇の人たちを紹介されました。第一次戦後派の人が多かったですね。武田泰淳さん、堀田善衛さん、野間宏さん、福永武彦さん、そういう大先輩と一緒に飲みました。泰淳さんは話の面白い方で、赤坂のお宅に始終行ききました。朝からビールを飲む

佐佐木▶はい、そうです。

館長▶当館の世田谷文学賞短歌部門選考委員を10年以上お願いしていますが、新聞の投稿欄の選者も長くなっていますね。「朝日歌壇」「朝日新聞」には毎週どれくらい作品が届くのですか。  
佐佐木▶3〜4000通ですかね。1回で2週間分を選考するので7〜8000通くらい目を通します。

館長▶あらかじめ絞っておくことはないのですか？

佐佐木▶予選はやりません。また、自分でとった歌を他の選者にわからないようにしています。今はコピーがあるからいいですが、昔は大変でした。僕が大学の研究休暇で1年間オランダに行っていた時は、国際宅急便で届きました。東京新聞の「東京歌壇」(東京新聞)の方は500通くらいです。

館長▶毎週投稿してくる人もいるのですか。  
佐佐木▶それはもう。僕は30年近く選考者をやつて

んです、朝から夕方までずつとビール(笑)。

館長▶坂本さんは編集者として広くお付き合いして仕事を依頼されたけれど、彼にとつては戦後派の作家が一番大事だったんですね。

佐佐木▶そうだと思います。椎名麟三さんにも坂本さんに連れられてお目にかかりました。いろんな人がいましたね。

館長▶大袈裟に言うくと、戦後の疾風怒濤というべき時代ですね。編集者として担当した戦後派の作家もおられますか。

佐佐木▶今言った方々ですね。僕がいた頃は三島由紀夫さんも御健在で、何度もお宅に行きました。僕が後楽園ジムでボクシングをやっていた頃に三島さんも後楽園のボディービルに行っていた

ことがわかって、そういう事から仲が良くなって、腹筋を触りつことかして(笑)。

館長▶ボクシングはどのくらいやっていらしたんですか？  
佐佐木▶3年間くらいです。後楽園ジムの指導者だった白井義男さんとスパリングをしたり。

館長▶白井義男って日本で最初の世界チャンピオンですよ。それはすごいな。実際に試合なさったことはあるのですか。

佐佐木▶試合に出た事はありません。高校時代にやっていたラグビーでは大学にスカウトの口

いますが、その前から投稿している人もいます。毎週10通以上の人もいます。

館長▶歌集を持っている人は投稿できないなどという規定はありますか。  
佐佐木▶それはありません。歌の世界は友人と素人の地平が繋がっていますから。他の分野で名の知られた方も大勢投稿されます。

館長▶現在、歌人の方ほどのくらいおられるのでしょうか。  
佐佐木▶100万人ほどと言われていますが、何十万人かもしれません。僕はいま、現代歌人協会の理事長をやっています。ここは入会審査があつて、700余人です。

館長▶僕はあまり歌人の方々とお付き合いがないのですが、「短歌研究」で島田修二さんと北原白秋について対談した際、やはり短歌の読み方が深

いとしみじみ感じました。  
佐佐木▶短歌は古典の時代から「読み」の歴史があります。そこが詩の読み方と多少違うのかも



『佐佐木幸綱の世界 第1期 全8巻』、1998～1999年、河出書房新社

が、ボクシングの才能は無かつたようです。やつてみて分かりました。強い人とはパンチの当たる角度が微妙に違うんです。強い奴は先天的にいい角度をバツと捉える。

館長▶ボクシングの歌もお作りになったんですか？  
佐佐木▶ええ。20首くらいはあつたと思います。最初に歌壇に出た頃は、スポーツの歌を作っていたんです。それで注目されて、雑誌に出るようになって。

館長▶スポーツの歌という具体的なには何ですか。  
佐佐木▶高校ではラグビーです。それからあと拳闘。その頃は「ボクシング」というよりは「拳闘」って言っていました。とくに、ジムの仲間のみな「拳闘」って言っていましたね。

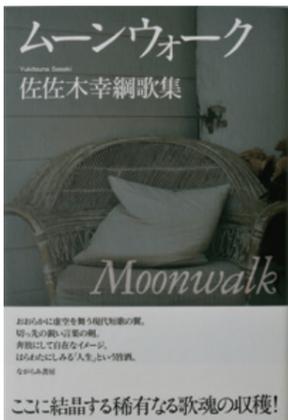
館長▶歌のうえで「拳闘」ですか。  
佐佐木▶「ボクシング」という言葉ももちろん使っています。「シャドウボクシング」とか。

館長▶ラグビーの歌は、ラグビーをやっている最中の歌ですか？  
佐佐木▶ラグビーをやっている歌です。実際に作つ

館長▶佐佐木さんの年代で一緒に歌を作ってきたのは、どんな方々ですか。  
佐佐木▶高野公彦君、伊藤一彦君、福

切磋琢磨と疾風怒濤





『ムーンウォーク』、2011年、なごらみ書房

たのは大学に入ってからですが。館長▼ラグビーほどのポジションでも走るのが速くないと駄目だと聞いたことがあります。佐佐木▼当時は速かったです(笑)。

これからの歌壇

館長▼話が変りますけど、佐佐木さんの目からご覧になって、今の歌壇の状況を、われわれ素人にも分かりやすく教えていただけますか。

佐佐木▼パブルの前後に短歌人口が増えました。80年代後半に俵万智の『サタ記念日』(1987年)が出て、あんなのなら誰でも作れる、と。館長▼日常の話し言葉で作れると、そういう感じでしょうか。

佐佐木▼はい。彼女はちゃんとした文語もわかってるので、メリハリをつけた口語です。でも、あれだけ自然体で大胆に口語が入ってきたり、缶チューハイのような商品名が入っていたりすると、俺でも作れるぞと。それで短歌を作る人が増えて、新聞投稿とか雑誌投稿も増えました。それが今少し減ってきています。

館長▼俵万智さんは佐佐木さんのお弟子さんと伺っていますが、デビューする前に歌を添削とか助言なさったことはあるんですか？

佐佐木▼学生として3年間くらい。その頃、僕は早稲田大学の文学部に非常勤で教えに行っていました。館長▼あの歌集が出た時はやはりちょっとびっくりしました。

佐佐木▼ブームになって、ブームってこういうものかと思いました。

葉で東電を修飾するとか、いろいろ工夫しています。果敢にやっていて、僕は感心しています。

館長▼とってつけたようでは歌としての形が整わなくて難しいでしょうけど、そういう試みもどんどんやっていただと頼もしいですね。

短歌は着地が大事

短歌は着地が大事

館長▼佐々木さんの歌に話を戻しますが、『ムーンウォーク』という歌集の題にびっくりしました。お、今はこういう時代なのかと。

佐佐木▼マイケル・ジャクソンに取材した短歌は入っていませんが、前に行くようで、実は後ろに歩くと言ったらいいのかな。この歌集は早稲田大学を辞める時の、教員生活何十年かの終わりの歌集です。教室であれこれ新しいことを喋っていたつもりだけど、実は前へ行っているようで下がっているんじゃないか、そういう感じがするといった程度の意味です。

館長▼お作りになった歌のうち、どのくらい歌集に拾われるんですか。

館長▼口語短歌は、同じ話し言葉、口語を使っているにしても口語詩とは全然違いますよ。『神奈川県立橋本高校』なんて短歌に出てくるとは思ってもみなかった(笑)。とても上手とか、いい歌というのは少し違いますが、新鮮な感じを受けました。それもいまや古びてきたということなのでしょう。

佐佐木▼ちよつと変わってきていますね。ツイッターのように、生活の中つぶやきみたいなもの、あるいはポップスの歌詞をつぶやき風に言う。今の二、三十代は、そういうものをネットで色々やっているようです。

館長▼そうした時代的な変遷について、ずっと短歌を作られてきてとくにお感じになることはありますか。

佐佐木▼口語が一般的になって、「型」の意識がうすれてきていますね。かつちりした文語が使え

天才的な人物が出てきて、しかも現代の気持ちにフィットするような短歌が待たれている気がします。もう一回古典ときちつと向き合わないといけないでしょうね。このままですると口語短歌がすすんでゆくのは、問題だと思います。

館長▼短歌の形として、がつちりした堅固なもの、伝統をちゃんとふまえたものの中に、新しい時代的な感覚が盛り込まれるとか、思想が表現されるのが望ましいということですね。僕も素人ながらそういうことは感じます。

佐佐木▼俵万智の歌もそうですが、日本語の複雑な深い意味、掛詞とか、伝統的に持っているニュアンスのようなものを切り捨てて、シンプルさ、透明さを売りにしていたわけです。そうではなく、もつと不透明なものというか、もつと混沌としているものが出てほしい。日本語の歴史はそれを引きずっているわけですから。日本語というの

は本来混沌としていますからね。それを抱き込んだ現代短歌がそろそろ出てきたほうがいいかなと思います。ただ、今はそういう状況になっていません、逆の流れになっています。反射神経的日本語、という感じの歌が幅をきかせていますね。

館長▼もうひとつは、社会や政治の状況とか、視野を広げようという姿勢で歌を作るための言葉が成熟していない感じがします。広い視野で作る歌は是非必要ですが、言葉の裏付けがない、すぐに血肉化するの

は難しいですね。

佐佐木▼今、高野公彦君が積極的に壊れた原発の歌を作っています。おっしゃるよう

に原発を歌うボキャブラリーが、なかなかありません。だから手持ちのボキャブラリーと探りだしてきたボキャブラリー、例えば、万葉集にある「鶏が鳴く東」という枕言

を、視野を広げようという姿勢で歌を作るための言葉が成熟していない感じがします。広い視野で作る歌は是非必要ですが、言葉の裏付けがない、すぐに血肉化するの

は難しいですね。

佐佐木▼今、意識的に酒の歌を作っています。佐佐木▼若山牧水のように。

佐佐木▼2年前に『牧水 酒のうた』という本で解説を書きました。それで牧水の酒の歌は360首くらいあるとわかり、それは超えなくてはと、もう超えましたが、牧水は43歳で亡くなっていて、僕は70歳を超えましたから、倍は作らないと足りない。そんなことで、今、意識的に酒の歌を作っています。

館長▼歌を作るために酒を飲むということはないですか？いい口実にして(笑)。

佐佐木▼どうせ毎日飲んでますから(笑)。

館長▼ほろ酔いの時に作ることもあれば、醒めてから作ることもあるわけですか？

佐佐木▼いろいろですね。ただ、最近

は朝早く歌を作っています。だから、酔っぱらってその場で作るというのは少ないですね。

館長▼酔っぱらってその場で作っても、なかなかうまいことできないでしょうね。人によりけりかな。

佐佐木▼短歌は、五七五七七の最後の七七、着地が問題です。七七でピタッと止まるのいいんです。俳句はそうじゃないから、俳句は酔っぱらっても、ぼけても大丈夫。かえってよくなる、と坪内稔典君が言っています(笑)。でも、短歌は着地がむつかしいんです。

館長▼最後キリリとしないと、端然した佇まいにならない。それも17文字と31文字との違いですね。これからもキリリとした歌を拝見するのを楽しみにしています。本日はどうもありがとうございました。

佐佐木▼ありがとうございます。

(2013年10月8日 世田谷文学館館長室にて)

展覧会のご案内

世田谷区内在住の書家による 第33回 世田谷の書展

―世田谷ゆかりの作家たち―  
2014年1月7日(火)～22日(水)

1階文学サロン

現代書壇で活躍する書家36名が、会派を超えて「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマに新作を一堂に披露する、世田谷文学館ならではのユニークな書展です。

出品予定書家 (50音順、敬称略)

- 荒谷 大丘、安東 麟、池亀 壽泉、石川 昌亭、泉原 壽巖、稲村 雲洞、稲村 龍谷、白倉 仔龍、卯中 恵美子、太川 啓澄、大根田 照雲、加藤 拓司、川口 青澄、久保田 青松、久村 祐司、黒田 石鼓、小久保 展代、後藤 俊秋、小林 早容子、師田 久子、下坂 華仙、鈴木 暁山、竹内 青紗、田中 栄子、坪西 美枝、戸田 幽翠、永井 閑翠、野口 白雲、服部 葉竹、東山 一郎、廣野 皐風、深田 東徳、丸尾 鎌使、安岡 田鶴子、横山 喜代子、渡邊 鄧美子

観覧料 無料

鑑賞講座

出品書家と鑑賞しながら、作品のみどころなどをわかりやすく解説します。書を芸術作品として鑑賞したい、これから書を始めたいという初心者の方もご参加ください。参加費無料。

- 1月10日(金) 師田久子(日展会員)
  - 1月11日(土) 池亀壽泉(読売書法会理事)
  - 1月12日(日) 泉原壽巖(日展会員)
  - 1月13日(月・祝) 後藤俊秋(毎日書道展審査委員)
  - 1月15日(水) 稲村龍谷(日展会友)
- 各日14時～15時、当日会場にお越しください。

星を売る店

クラフト・エヴィング商會の おかしな展覧会

2014年1月25日(土)～3月30日(日) 2階展示室

クラフト・エヴィング商會は吉田篤弘さんと吉田浩美さんによる、著作およびデザイン・ワーク、アート・ワークのユニットです。架空の商店として、『ないもの、あります』、『らくだごぶ書房21世紀古書目録』などの著作を通じさまざまな品を世に送り届ける一方、デザイナーとして、これまでに何百冊もの書籍の装丁を手がけています。また、吉田篤弘さん個人名義での小説も数多く、『つむじ風食堂の夜』は2009年に映画化もされました。

初の大規模個展となる本展では、展示室の空間全体がクラフト・エヴィング商會の作品ともいえるような、インスタレーションの展示を試みる予定です。会場内にはクラフト・エヴィング商會の(架空の)お店も姿をあらわし、来場者を虚実混交した物語の世界へと引き込みます。さらに、会場の一角には(実際に)仕事をするためのワークスペースも出現する予定です。型破りな「おかしな展覧会」に、どうぞご期待ください。

- \* 観覧料は8頁をご覧ください。
- \* 目下展示プランを検討中のため、今後予告なく右記の展示予定内容を変更する場合があります。予めご了承ください。
- \* 本展図録は平凡社より刊行予定です。(当館ミュージアムショップのほか、全国書店で販売予定)
- \* 会期中の関連イベントについては、当館ホームページをご覧ください。

当館収蔵品のご紹介49

田辺和雄「山日記」

山行の行程やその中の出来事、見た風景などを書き記し、登山者にとってはかけがえのない思い出の記録となる「山日記」。今回は植物学者で登山家でもあった田辺和雄(1900~1961)が長年にわたり書き残し、当館に寄贈された40冊の「山日記」をご紹介します。

山に明け暮れた学生時代

田辺は旧姓を濱田といい、陶芸家・濱田庄司の実弟です。東京市芝区明舟町に生まれた田辺は小学校五年の時、旅行と植木好きだった父に連れられて妙義山に登りました。それ以来、次第に山や植物に惹かれ1918年7月、旧制中学4年生にして初めて北アルプスへ挑みます。燕岳から槍ヶ岳へ至る道のりを案内人と2人で歩いた田辺は、残雪に輝く峰々、コマクサの群生するお花畑の美しさ、そして素朴で直直な案内人の優しさに強く心を打たれたのでした。

その後、進学した旧制第二高等学校で旅行部に所属した田辺は、数々の高峰登頂記録が報告されていた当時であって、1926年4月、友人2人とともに鹿島槍ヶ岳の積雪期初登頂という記録を日本登山史に刻みました。時間を見つけては部員とともに関東近辺の山を中心に登山を続けた学生時代から田辺の「山日記」は書かれ始めますが、横長の見開きいっぱいに書かれた稜線のスケッチや、峰の名前や景色についてのメモなど、山に親しみ始めた頃の驚きや新たな発見への純粋な感動が記されるとともに、仔細なスケジュールや同行のメンバーの名が記されたページも多く見られます。その中には、生涯にわたり幾度となく山行を共にした作家・深田久弥の名前もありました。



田辺和雄自筆「山日記」

私と同時代に二高旅行部に属していた者で、その浜田さんの影響を受けなかった者はあるまい。浜田さんはいとも私たちの先頭にいた。もし各学校の山岳部にそれぞれの気風があるとしたら、一高のそれを築きあげた人は、私たちの時代では田辺君であつただろう。私たちは意識無意識のうちに、田辺君の態度を模範としてそれに倣つた。私は今に至つても、広い意味での山の歩きかたは、田辺流を踏襲している。(田辺和雄「山とお花畑 原色写真で見る高山植物」第一巻 跋 1961年 高陽書院)

田辺の著作に寄せた跋文で深田が語るように、田辺は登山における先輩であり、田辺にとつても深田は気の置けない後輩の一人だったのでしよう。深田が一高へ入学した1922年の夏に常念岳と槍ヶ岳

7月に白馬山、1925年5月に苗場山、1926年10月には至仏山と、幾度も山行を共にします。深田は山についての知識と素晴らしい登山経験を享受したことで、作家としての方向性に大きな影響を受け、田辺も友人・後輩たちと共に登山家としての青春を謳歌したのです。その後、深田は東京帝国大学文学部へ進み、田辺も同大学理学部植物学科へ進学します。すでに高山植物についての豊富な知識を持っていた田辺でしたが、日本高山植物研究の先駆者であり、



田辺和雄(中央)と深田久弥(右)(撮影年未詳)

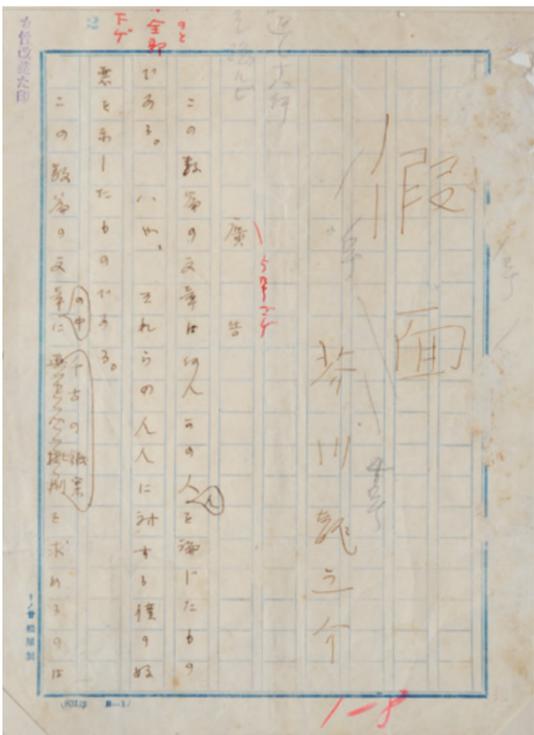
登山家でもあった武田久吉に師事し、植物学者としての道を歩み始めます。

登山家として、植物学者として  
1930年、田辺は東京帝大大学院を経て旧制松江高等学校教授に着任、太平洋戦争後の1949年には早稲田大学講師として生物学研究室に入り、四季を通じて登山を繰り返し高山植物の研究に没頭しました。1931年には武田久吉との共著『高山植物写真図聚(梓書房)』1937年には踏査研究のライフワークとしていた白馬岳についての解説書『白馬岳―山とスキーと植物の案内(東京古今書院)』を刊行。専門書の体裁ながら、わかりやすい解説と多くのカラー図版で一般読者も親しみやすい山の案内書を著していきま

自身の仕事のうちに続く登山者たちのために広く供そうと考えたのは、少年時代から親しんできた

資料受贈報告

- ▼宇田健様より開高健・中野重治・中山義秀ほか諸家書簡 田中政子様より上田五千石資料一式
- ▼新井啓子様 稲垣信子様 井上閑子様 岡玲子様 小野塚力様 花鳥伯様 木下径子様 黒羽英二様 小海永二様 皿海達哉様 竹田美喜様 館野鴻様 林嗣夫様 日高のぼる様 増井梅宗國様 三田洋様 村岡功様
- ▼青森県近代文学館 アジア文化社 郁朋社 いわき市立草野心平記念文学館 大分県教育委員会 大岡信こ とば館 大佛次郎記念館 海音寺潮五郎記念館 かごしま近代文学館・メルヘン館 神奈川近代文学館 菊池寛記念館 北九州市立松本清張記念館 現代文学史研究所 江東区芭蕉記念館 駒澤大学禅文化歴史博物館 さいたま文学館 斎藤茂吉記念館 佐佐木信綱研究会 サトエ記念21世紀美術館 静岡市立登呂博物館 思潮社



芥川龍之介原稿「僻見」(執筆時の題名「仮面」)

平成24年度の収蔵品について

昨年度に収集した収蔵品819点は、皆様からのご寄贈によるものです。ご協力に感謝申し上げます。ここでは主な収蔵品をご紹介します。(敬称略)

◎北杜夫旧蔵 齋藤茂吉関連資料◎

寄贈者:齋藤喜美子  
寄贈品:芥川龍之介原稿、齋藤茂吉あて芥川龍之介書簡、齋藤茂吉短冊など(30点)



齋藤茂吉短冊

山中に雉子が啼きてゆく春のくもりのふるふひるつ方あはれ

茂吉

◎北杜夫書簡◎

寄贈者:故 辻 佐保子  
寄贈品:辻邦生あて封書・はがき(111点)



北杜夫の航海途上、アレクサンドリアから昭和34(1959)年3月17日

◎萩原葉子資料◎

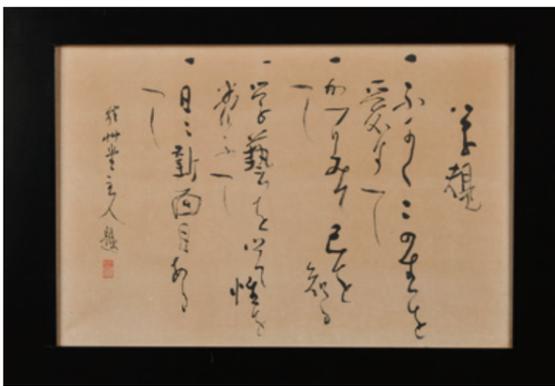
寄贈者:萩原朔美  
寄贈品:萩原葉子遺品(18点)



萩原葉子が息子・朔美のために手作りした手袋・靴下・帽子

◎小林正樹旧蔵資料◎

寄贈者:故 小林千代子  
寄贈品:會津八一書、小津安二郎書画色紙(2点)



會津八一書「学規」

◎江間章子資料◎

寄贈者:成田敦子  
寄贈品:江間章子原稿、書簡、著書など(243点)



江間章子原稿「もしもあなたが」



江間章子「乙女のあこがれ」1949年

企画展

幸田文展

2013年10月5日(土)  
～12月8日(日)  
2階展示室

観覧料:  
一般700(560)円  
高校・大学生500(400)円  
65歳以上・障害者350(280)円  
小学・中学生250(200)円  
\*( )内は20名以上の団体割引



撮影:片岡露満

第33回  
世田谷の書展  
—世田谷ゆかりの作家たち—

2014年1月7日(火)～1月22日(水)  
1階文学サロン 観覧料:無料



星を売る店  
クラフト・エヴィング商會の  
おかしな展覧會

2014年1月25日(土)  
～3月30日(日)  
2階展示室

観覧料:  
一般700(560)円  
高校・大学生500(400)円  
65歳以上・障害者350(280)円  
小学・中学生250(200)円  
\*( )内は20名以上の団体割引



企画展

幸田文展  
10月5日(土)～12月8日(日)

第33回 世田谷の書展 1月7日(火)～1月22日(水)

星を売る店 クラフト・エヴィング商會のおかしな展覧會 1月25日(土)～3月30日(日)

12月

2014年1月

2月

3月

コレクション展

旅についての断章 10月5日(土)～4月6日(日)

コレクション展

旅についての断章

10月5日(土)～2014年4月6日(日)  
1階展示室



観覧料:一般200(160)円/  
高校・大学生150(120)円/  
65歳以上・障害者100(80)円/  
小学・中学生100(80)円  
\*中学生以下は土・祝・日は無料  
\*( )内は20名以上の団体料金

せたがや文化財団の催し物

- 世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]
- 実験工房展—戦後芸術を切り拓く 11月23日(土・祝)～2014年1月26日(日)
- 岸田吟香・劉生・麗子 知られざる精神の系譜 2014年2月8日(土)～4月6日(日)



岸田劉生「童女図(麗子立像)」1923年4月15日、  
神奈川県立近代美術館蔵

- ミュージアム コレクション II
- 気になる、今度の收藏品 8月29日(木)～2014年1月13日(月・祝)
- ミュージアム コレクション III
- 画文往還 世田谷の文人たち 2014年1月25日(土)～4月20日(日)



石川寒巖  
《山間行人》  
1926年

- 世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館 [Tel. 03-5450-9581]
- 開館20周年 向井潤吉と四季 冬 12月14日(土)～2014年3月21日(金・祝)

- 世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー [Tel. 03-3416-1202]
- 開館10周年 清川泰次の世界 III ジャンルを超えて 絵画からの展開 12月14日(土)～2014年3月21日(金・祝)

- 世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館 [Tel. 03-5483-3836]
- 宮本三郎と奥沢の芸術家たち 12月14日(土)～2014年3月21日(金・祝)

- 世田谷文化生活情報センター 世田谷パブリックシアター [Tel. 03-5432-1526]
- 世田谷パブリックシアター 芸術監督 野村萬斎 企画・監修 現代能楽集 VII 「花子について」 作・演出:倉持裕 出演:片桐はいり、西田尚美、近藤公園、小林高麗、黒田育世 2014年2月5日(水)～16日(日) シアータラム

- 『神なき国の騎士—あるいは、何がドン・キホーテにそうさせたのか?』 作:川村毅 演出:野村萬斎 出演:野村萬斎、馬淵英俤可、木村了、中村まこと 他 2014年3月3日(月)～16日(日) 世田谷パブリックシアター

- 世田谷文化生活情報センター 生活工房 [Tel. 03-5432-1543]
- 「集う衣服」展—眞田岳彦 生命をつつむ未来繊維プロジェクト 3 2014年1月25日(金)～2014年1月19日(日) 生活工房ギャラリー



- 7つの海と手しごと vol.4 「ギニア湾とヨルバ族のアディレ」 2014年1月25日(金)～2月23日(日) 生活工房ギャラリー

- 世田谷文化生活情報センター 音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

- 異分野とのコラボレーション 「料理と音楽」 出演: 田崎真也(ソムリエ)、山本益博(料理評論家)、池辺晋一郎(作曲家/音楽監督) 他 音楽監督 池辺晋一郎



- せたがや名曲コンサート ベートーヴェン 第九 出演:円光寺雅彦(指揮)、世田谷フィルハーモニー管弦楽団、世田谷区民合唱団 他 2014年2月23日(日) 14時開演 昭和女子大学人見記念講堂

休館日:  
毎週月曜日  
(ただし月曜日が休日の場合は  
開館し、翌日休館)

開館時間:  
10時～18時  
(ただし展覧会入場は17時30分まで)  
交通案内  
京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分  
小田急線「千歳船橋」駅より京王バス  
(千歳烏山駅行)利用「芦花恒春園」  
下車徒歩5分

公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10 Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120  
ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>



野村萬斎  
(撮影:久家靖秀)

